

受賞記念講演：「アジアからの新時代」

文化賞／隈研吾 建築家 東京大学特別教授・名誉教授

現在、世界は文化の大きな変わり目にきています。いままでの人類の歴史・文化は一言で言えば、「都市への集中」です。コンクリートの超高層ビルは集中の極致です。効率性を求めて走ってきた結果、地球や環境がもたなくなってきました。

ではこれをどう変えるか。変えるのではなく、振り返る必要があると考えています。そのヒントは、東アジアの文化の中にたくさん隠れています。東アジアには古くから、自然と共に歩み、自然と人間は同じ循環の輪の中にあるという考え方がありました。それが最も表れているものが木の建築であり、それを代表する場所が奈良です。その証拠に、奈良には、世界最古の木造建築物である法隆寺と、つい最近まで世界最大だった木造建築物の東大寺があります。

こういう考えに基づいてデザインに携わったのが、オリンピックスタジアムである国立競技場です。明治神宮という神社の森の中にあります。神社は森を非常に大事にしてきました。建物の外壁には日本の杉を使いました。「長持ちするのか」と質問を受けますが、法隆寺を例に出して説明しています。東アジアの木造は木材のつなぎ目が少し動くようになっており、地震などに強い構造ができていました。今の構造のエンジニアもびっくりするような技術を持っていたわけで、国立競技場にも応用しています。

私が木造を特に重要と考え始めた2000年頃に手掛けた「那珂川町馬頭広重美術館」は、屋根も壁もほとんど木できており、建物に開けた穴で森とつながっています。日本では村の裏にある森を里山と呼び、その脇に住んで、森を守りながら、森の宝を大事に使ってきました。これが東アジアのライフスタイルだったわけです。森の脇には必ず神社があり、森を全部なくしてしまったら生きていけないという強いメッセージを送っていました。そのような文化が東アジアのベースにあり、里山、神社、それから村の関係に現れているわけです。この建物では、人と森をもう一度つなぎ直すことをイメージしています。さらに、壁も楮（こうぞ）という植物を使って地元の職人が造ったものです。地元の森の材料を使って生活し、循環することも、経済の基本になっていました。東アジアでは文化も経済も、森が起点となっていました。

「竹屋 (Great (Bamboo) Wall)」は、竹を使って造ったホテルです。中国の万里の長城のすぐ近くにあり、通常、このような場所では、木を切って、土地を造成してから建築を行います。緑をそのまま守りました。

イタリアのミラノで手掛けた「Chidori」は、くぎも接着剤も使わず、木材を組んで造った実験的パビリオンです。日本の大工の技術がいかに優れているかが分かるような、細い木による緻密な構造システムです。

「茅葺（かやぶき）屋根」も東アジア独特のものです。強い日差しから建物を守るだけでなく、腐敗すると肥料として再利用する循環システムです。2025年の大阪・関西万博でもテーマ館の一つを茅葺屋根で造っています。ここで使われた茅を万博終了後に再利用するという、大きなシステムとして提案しています。

ヨーロッパでも木の建築を設計しています。フランスのブザンソンという街では、川辺の古い倉庫の周囲に、地元の木材を使った建物を継ぎ足していき、小川もデザインして、一つの自然を街中に取り戻すプロジェクトを試みています。パリのサンドニ・プレイエル駅は、屋上を公園にし、内装に木を使い、街の中に緑の空間ができあがります。

これらは、東アジアの知恵に世界の人たちが今注目していることの証拠ではないかと思うわけです。東アジアでは「自然を循環させる」、今の言葉で言えば「サステナブル」という思想が昔からありました。その意味で、奈良は技術の宝庫です。吉野杉は、世界でも例のない育て方で作られるため、非常に美しい木目を持ちます。奈良の杉には、人間と自然が1000年以上をかけて共につくった技術が詰まっています。これからの世界の文化、あるいは世界の経済を考えたときに、人間と自然が一緒につくっていくという考え方が一番重要だと思います。単に自然を守るというのではなく、人間と自然が一緒になってそれらを守る知恵をつくっていかなければいけません。そういう一番良い例がこの奈良という場所にあって、それがこのような賞の場所になっていることに、私は単なる偶然以上のものを感じています。

